慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	打ち出でて見れば : 逢坂山と近江の水
Sub Title	"UCHIIDETEMIREBA" : Ohsaka-yama and water of Ohmi
Author	島崎, 良(Shimazaki, Ryo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.41, (1980. 12) ,p.24- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00410001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

打ち出でて見れば

——逢坂山と近江の水——

島崎良

萬葉集巻十三

『萬葉集』巻十三には、逢坂山を詠み込んだ歌が四首みられる。集全体ではこの他にわずか三例を数えるのみであるから、半数以上が巻十三に集中していることになる。そしてこの四首は、大和の都から山背を通り近江への道筋の土地を詠みこんだ「道行」というべき歌群に含まれている。つまり、近江国にかかわる道行を中心とした歌がひとまとまりに編集されているという特殊な事実が見られるわけである。そこで一応、巻十三が持つ性格の特徴を考えておく必要があると思われる。

わずかな左注以外詞書の類を持たない巻十三に標題を与えるとするならば、「無山縁雑歌」と言うことができるであろう。すり切れた詞章から構成されている巻十三を理解するには、対立する巻として巻十六をとらえることにより、収録歌の性格をたどる道筋にいくらかの手がかりを見出すことができる。この巻十六は、他の巻々とは成立を異にすると思われる詞書・左注により収録歌の制作動機、歴史的前提が説かれている。すなわち、巻十六の収録歌が諸本の目録、

本文の初めに見える標題に「有由縁雑歌」と総称されているのに対照すると、巻十三は、いわば「無由縁雑歌」もしくは「未詳由縁雑歌」の巻と称することが可能である。

巻十三は、雑歌・相聞・問答・譬喩歌・挽歌と萬葉集の部立を総動員した形で分類され、新しい歌学の概念が巻の構成上に働いている様子をうかがわせる（相聞以下の部立は、しいて言えば広義の雑歌とみることができる）。そしてさらに、それぞれの歌の中に詠み込まれている地名を手がかりとして、再度の分類・配列がおこなわれている。雑歌を例にとると、

大和（3221～3229）吉野（3230～3233）伊勢（3234～3235）近江（3236～3241）美濃（3242）……

といった国ごとの分類配列がほどこされているのである。こういった二本立の分類方針を見ると、もともと土地・地名と深いつながりを持った歌の数々がある目的をもって集められたところ、その由縁が失われてしまい、その上から新しい歌学の概念で分類編集されたという成長過程があったことを考えさせられる。

由縁を欠いたまま成立している巻十三の歌群は、伝承の途上で背景が忘れられたか、書き留められなかったものであり、歌自身の中から手がかりを探り出すことによってその由縁を復原できる可能性を有する雑歌ということができる。また、由縁を正確に説こうとしないまま伝承されてきたということは、巻十三の歌それ自身では独立して存在できず、何らかの宗教行事、芸能神事に付随して成立していた伝誦歌であった姿を想像させる。(1)

こうした巻十三の特徴を並べてみると、この巻に収録された歌の伝承の背景には、忘れ去られてしまった「伝承の機会」の存在を想定することができる。この論文では、『萬葉集』の時代及びそれ以前の逢坂山の姿をうかがわせる、「右三首」の左注でひとまとめにされた三二三六・三二三七（或本歌曰）・三二三八（反歌）の歌群を中心にとりあげ、逢坂

山と近江の水にまつわる信仰の周辺及び巻十三の伝承の背景を探ってみたい。

巻十三の歌群を検討する前に、まず逢坂山の伝承の変遷を概観しておくことにする。

逢坂山

逢坂山の印象を人々の頭の中に植え付け、固定させる上で大きな貢献をしたのは、『後撰集』巻十五雑一に載せられた蟬丸の

あふ坂の関に庵室をつくりて住みはべりけるに行きかふ人を見て　蟬丸

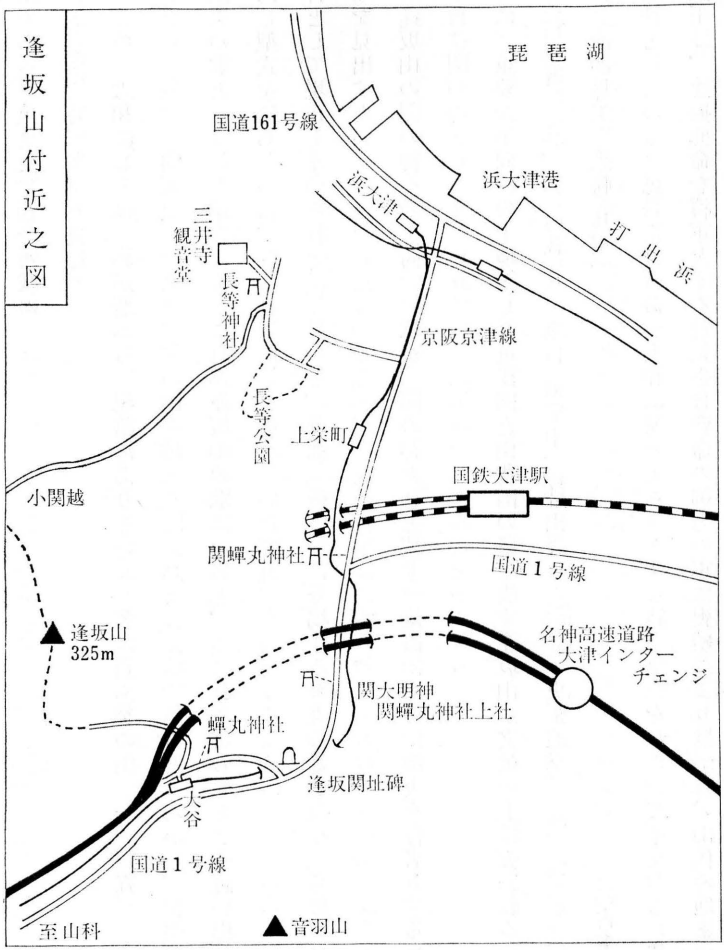
これやこの　行くも帰るも　別れつつ　知るも知らぬも　逢坂の関　（一五・一〇九〇）

という歌であろう。『後撰集』の詞書によると逢坂の関に庵をむすんで住んでいたとされる蟬丸は、その他にも伝奇的な生涯をさまざまに伝えている。『今昔物語』では宇多天皇の皇子敦実親王の雑色とされる一方、『平家物語』をはじめ中世以降の語り物類では醍醐天皇の第四皇子と伝えられるなど、確かな所伝を持たない伝承の人物である。百人一首にこの歌が収録される時代になると、逢坂の関のあたりに住んだ盲目の琵琶の名手とする伝えが一般に信じられていたようである。

この蟬丸の歌は

これこそ逢坂の関だ。行くものも帰るものも、ここで別れ別れしていき、そして知った人も知らない人も行き逢うているところの、逢坂の関よ(2)

と、長く別れていた者がここで偶然に逢うという逢坂の関の名前から生じた伝説をふまえ、関の往還をめぐって繰り返


逢坂山付近之図
琵琶湖
国道161号線
浜大津港
浜大津
打出浜
三井寺観音堂
長等神社
京阪京津線
長等公園
上栄町
国鉄大津駅
小関越
関蟬丸神社
国道1号線
逢坂山
325m
名神高速道路
大津インター
チェンジ
関大明神
関蟬丸神社上社
蟬丸神社
逢坂関址碑
大谷
国道1号線
至山科
音羽山

される人生の変転をたくみに詠み込んでいる。

同じ類型である『萬葉集』巻一所載の

越二勢能山一時阿閇皇女御作歌

これやこの　大和にしては　わが恋ふる　紀路にありといふ　名に負ふ勢の山（一・三五）

という阿閇皇女（後の元明天皇）の歌は、勢の山を越える時に詠まれた歌であるところから、紀州路の境の神に手向けた挨拶、讃美の歌と言うことができる。[3] これが逢坂山の歌になると、「これやこの」という詠い出しや「体言止」の結句という同じ型式を持ちながら、関の付近に居を構えていた蟬丸を作者とするようになっている。しかし、この蟬丸自身が関の神として現在もまつられていること、[4] 謡曲「蟬丸」に登場する蟬丸の姉が負う「逆髪」の名の背景には「坂神」の印象を見出すといった点を考え合わせると、蟬丸の背後には関の神の姿の投影を色濃く読みとることができる。すなわち、逢坂山の関の神への手向けの歌が、関の神とひと続きの位置にあった蟬丸を作者とする歌へ成長し、やがてその蟬丸が再び関の神としてまつられていった道筋をたどることができる。

このように、重要な手向けの土地として近江国と山背国の境を成す逢坂山が文献の上に表われるのは、

於レ是其将軍既信レ詐、弭レ弓蔵レ兵。爾自二頂髪中一、採二出設弦一（一名云二宇佐由豆留一）更張追撃。故、逃二退逢坂一、対立亦戦。爾追追敗レ於二沙沙那美一悉斬二其軍一。

（『古事記』仲哀天皇条）

をもって最初としている。息長帯日賣命が大和に還り上ろうとする時、皇位をねらって軍をおこし待ち迎えた仲哀天皇の皇子忍熊王は、建振熊命を将軍とする息長帯日賣命の御方の軍に喪船により敗かれ、山代の地まで撃退される。ここで陣容を建て直し、両軍共に一歩も退かず戦ううち、建振熊命は再び計略を用い、それに破れた忍熊王の軍は最後の防

鑿線とした逢坂での抵抗も空しく、逢坂を近江側へ下った湖岸の沙沙那美の地で打ち破られた。

同じ戦を『日本書紀』の記事によって見てゆくと、

> 忍熊王知レ被レ欺、謂二倉見別・五十狭茅宿禰一曰、吾既被レ欺、今無二儲兵一。豈可レ得レ戦乎、曳レ兵稍退。武内宿禰出二精兵一而追之。適遇二于逢坂一以破。故號二其處一曰二逢坂一也。（神功皇后摂政元年三月）

とあり、両軍がたまたま逢坂にて対峙したことからその地を「逢ふ坂」と名付けたという『古事記』には見られない地名起源の説明を載せている。

この地名起源の伝承は『古事記』景神天皇の条に見える

> 故、大毘古命者、隨二先命一而、罷二行高志國一。爾自二東方一所レ遣建沼河別與二其父大毘古一共、往二遇于三相津一。故、其地謂二相津一也。

などの伝えと同じように、人と人が出会ったことにちなみ、その土地に相津・逢坂といった地名を付けるという類型伝承の一つである。ところが、逢坂の地名を構成する「逢ふ」という語の背後には、単に人が出会うという意味にとどまらず、「戦う、争う」という内容をあらわす「あふ」の意が、古く地名の成立段階において強く働きかけていたことがうかがわれる。同じ神功紀元年の条に載せられた、忍熊王の軍の士気を鼓舞する歌謡の中で

> ……親友（トモ）はも親友どち　いざ阿波（アハ）な我は……（日本書紀歌謡28）

という句が用いられ、「さあ闘おう我々は」と詠っていることも暗示的である。

記紀の伝承では、戦の最終激戦地となり得る重要な土地としてとらえられた逢坂山は、三関の一つとして確固たる位置をきずいてゆく。三関は不動の鈴鹿・不破を除いて、時代により愛発から逢坂への変化があり、有職故実の書物の中

には勢多をあげているものもある。[5] 年代によって多少の異同はあるものの、三関はいずれも都の所在地より東に位置し宮廷の勢力範囲が西から東へ拡大する途上のある時期に半ば儀式的に固定した姿を見せている。そして、鈴鹿・不破・愛発の三つの地点を境界としてとらえるようになった時期というと、近江朝を一つの目安としてあげることができる。近江大津の都を守護する意識のもとに定められた三つの境の地点が三関の基礎となっているようである。

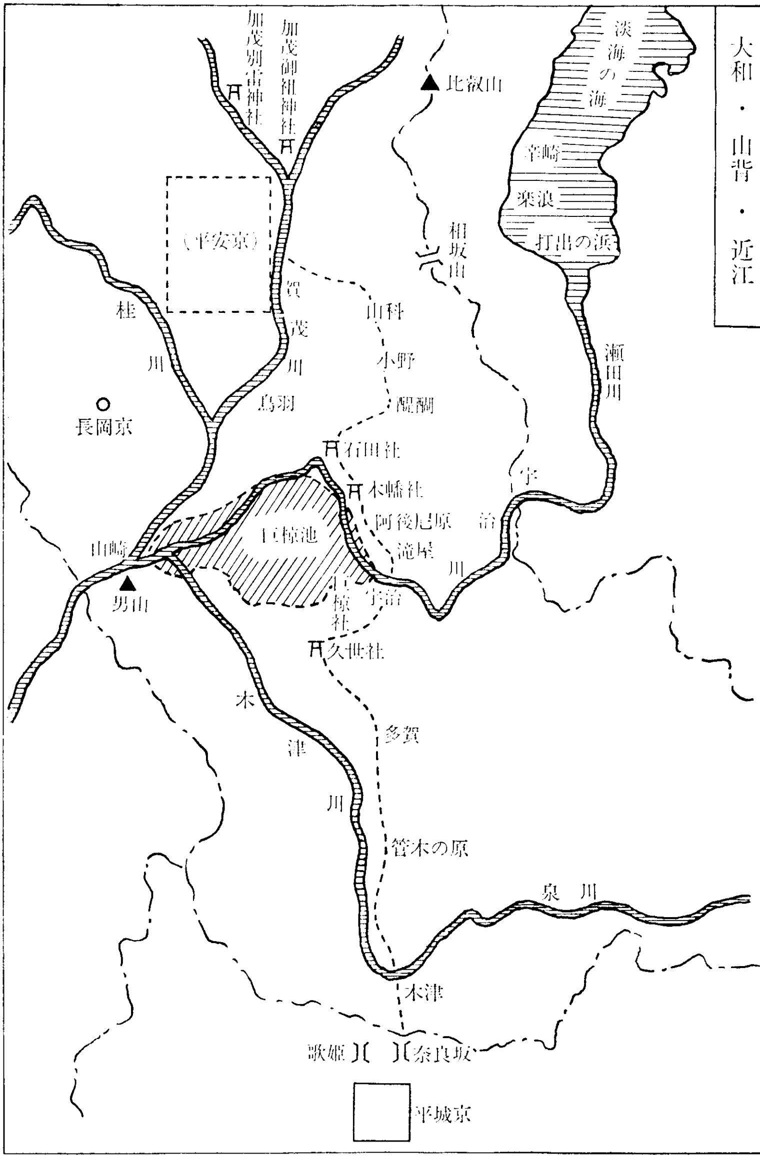
平安京に遷都がおこなわれることによって鈴鹿・不破・愛発の三つの関が京都の宮廷の遠い守りであり、近い守りは逢坂関と合理的に解釈されるようになる。そのため、都に最も近接した逢坂関の持つ意味が非常に重要になり、他のどの関よりも大きな存在としてとらえられるようになっていった。[6]

逢坂関はその伝承の中に、およそ関というものが持つべきすべての要素を包含していると言うことができ、長い年代、多くの方面にわたってさまざまな課題を与えてくれる。その中からこの論文では、平安遷都がおこなわれ逢坂関として重要視される以前の逢坂山がどのような役割を果たしていたか、どういった意識で人々にとらえられていたかを、前述の『萬葉集』巻十三の歌群を検討することによって明らかにしてゆきたい。

山背の水

そらみつ　大和の国　あおによし　奈良山越えて　山背の　管木の原　ちはやぶる　宇治の渡り　滝屋の　阿後尼の原を　千年に　欠くることなく　万代に　あり通はむと　山科の　石田の社の　すめ神に幣取り向けて　我は越え行く　逢坂山を　（三二三六）

この長歌は、奈良山を越え山背国に入り、管木の原―宇治の渡り―滝屋―阿後尼の原―山科の石田の社の順に詳しく


大和・山背・近江
加茂別雷神社
加茂御祖神社
比叡山
淡海の海
辛崎
楽浪
打出の浜
相坂山
(平安京)
賀茂川
桂川
山科
小野
醍醐
鳥羽
長岡京
瀬田川
石田社
木幡社
阿後尼原
巨椋池
宇治川
滝屋
山崎
男山
巨椋社
宇治
久世社
木津川
多賀
管木の原
泉川
木津
歌姫
奈良坂
平城京

地名をたどりつつ逢坂山を越えていよいよ近江国へ入ろうとして一首が終っている。

まず最初に、大和と近江をつなぐ交通路である山背国の中の詠われるべき地名について考えておかねばならない。大和の都から奈良坂を越え山背国に入ると管木の原に出る。木津川が直角に方向を変え北上する右岸の平野部にあたり、『和名抄』に「綴喜（豆々岐）」郡、「綴喜（豆々木）」郷を載せ、綴喜郡の名を今に残している。管木の原の多賀・久世などの地を過ぎると宇治の渡である。宇治は三二三七・三二四〇の長歌にも詠みこまれ、山背国の土地の中でも詠っておく必要のある土地として度々登場している。続く滝屋・阿後尼の原は所在不明の土地であるが、道行の順序から見て宇治と石田の中間にあたり、木幡の付近の地名と思われる。滝屋は旧訓「タキノヤ」とされていたものを、『山城風土記』逸文に採択された多田義俊『創稧辨』の

山城風土記曰　宇治瀧津屋　祓戸也云々

という記載から、古典大系本『萬葉集』をはじめとして「タギツヤ」と改めている。そして石田の社は、『大日本地名辞書』所引の『山城名勝志』によると

天穂日命明神は延喜式宇治郡に見ゆ、今石田森の田中明神と云者是也

とある。ここでは「須馬神」に幣を手向けているが、この神は皇神を意味するものではなく、山科の地方を領有する土地の神であったものと考えられる。(7)

三二三六の長歌は「千年に欠くる事無く、万代にあり通はむと」という神に対する慰撫、「すめ神に幣取り向けて」といった奉仕の句から見て、旅の道中の要所要所に蟠踞する土地の神へ幣帛をたむける時の歌とすることができる。

またこの長歌に詠われている「宇治の渡り」と「滝屋」の水辺の二ヶ所では、水に関係した手向けの神事がおこなわ

れたと考えられる。『山城風土記』逸文の記事は後代のものであり、資料としての価値はいくぶん劣るものの「祓戸也」という点は暗示的である。奈良山と逢坂山では境の手向けが、石田の社ではその地方の神に幣を取り向け、宇治の渡・滝屋などの川に面した重要な土地を通過する際には、禊・祓の要素が濃い水辺の手向けがおこなわれたのであろう。

山背国は、大和の背後にある土地として、木津川・宇治川といった豊かな水の印象が非常に強い土地である。その土地を経て近江国へとむかってゆく。

或本歌曰

あおによし　奈良山過ぎて　もののふの　宇治川渡り　處女(をとめ)らに逢坂山に　手向け草　幣取り置きて　我妹子に
近江の海の　沖つ波　来寄る浜辺を　くれくれとひとりそ我(あ)が来る　妹が目を欲り　（三二三七）

「或本歌曰」として配列された長歌であるが、三二三六の異伝とは言い難く、大和から近江への道行歌の類型ということで並べられたのであろう。三二三六が歌の後半を無くしてしまった様な姿なのに対して、この長歌では逢坂山を越えて近江国に入ってからの情景を不完全ながらも伝えている。編者もこの二首を並べて配列することによって互いに足りない部分を補おうとしているかのごとくである。

またこの二首目の長歌は道行の詞章としては非常に省略されており、山背国の土地は宇治を中継するだけで逢坂山に至っている。それに続く後半は「我妹子に近海の海」という句から歌の主題が転換して相聞発想へと方向を変えてしまっている。雑歌の部立に配列され、道行の詞章を持っているところから見て、この長歌はもともと旅の宴会の場で詠われた相聞発想の歌なのであろう。しかし、同類の歌が何度も繰り返して詠われているうちに作者個人の境遇が入りこ

み、このような形になったものと考えられる。

打ち出でて見れば

反歌

逢坂を　打ち出でて見れば　近江の海　白木綿花に　波立ち渡る　（三三八）

この反歌は一見何の変哲も無い歌であり、一般的に「大和からの旅人が、逢坂山を越えて広大な琵琶湖を目にした時の感動を率直にうたった歌である。」といった解釈がなされている。しかし、これだけで片付けてはしまえない多くの問題を含んだ歌なのである。

まず最初に注目すべきは「打ち出でて見れば」という句である。「逢坂を打ち出でて見る」とは具体的にどういう情景を示しているのであろうか。逢坂山から湖水を見下ろして詠まれたものか、湖水の岸辺まで下りて来て詠んだものかこの歌からだけではきめかねる。そこで、この句から思い出される山部赤人の

田子の浦ゆ　打ち出でて見れば　真白にぞ　富士の高嶺に雪は降りける　（三・三一八）

の短歌を類型としてとらえながら解釈を試みてみたい。

赤人の歌でも「打ち出でて見れば」という句はもう一つはっきりしない。海上へ舟で出ていったのか、海岸にいるのか、「田子の浦」の「浦」の解釈次第で動揺する。だが、右の短歌を反歌に持つ長歌[8]は、旅の宿りにおける宴会の席で富士山を詠ったものと見当をつけることができるため、この短歌も海上からの眺望とまで考えなくても良いと思われる。すなわち、歴史的時間的に富士山を詠った長歌に対して、「田子の浦の海岸をば、先の方まで歩いて行って、そこ

から見るというと」というように、現在の眼前の光景である富士山を直叙したものと、作者の存在する時間と空間の位置を一応決めてかかることができるのである。

「打ち出でて見れば」という句を、赤人の短歌を参考にしてこのような手順を踏んで考えてみると、三二三八の反歌にしても、逢坂山を越えて淡海の湖岸を見下ろせる所に立ち、そこから岸辺に寄せ来る波を眺めるという作者の空間的位置が決まってくるようである。「打ち出でて見る」という句の類型を考えるには、赤人の短歌に続いて黒人の羈旅歌をとりあげねばならない。『萬葉集』巻三「高市連黒人羈旅歌八首」のうち

四極山　うち越え見れば　笠縫の　島漕ぎかくる　棚無し小舟　（三・二七二）

の歌は、四極山・笠縫の島共に攝津・三河等に擬する諸説があるが、その所在を明らかにする積極的な根拠はみつからない。また八首の配列の上に手がかりを求めるにしても、近代短歌の連作のように、同じ時の引き続いた進展を追いつつ作られたものではないから、この面からの考察も十分にはいかない。

しかし一方でこの歌は、後世に「しはつ山ぶり」の名のもとに伝誦されており、

しはつ山ぶり

しはつ山　うちいでてみれば　かさゆひの　嶋こぎかくる　たななし小舟

（『古今集』二十・一〇七三大歌所御歌）

とあって、声楽の分野でもてはやされたことを想像させる。「しはつ山ぶり」として『古今集』に収録される段階では「うち越え見れば」の句が「うちいでてみれば」に変化して、伝承の途中で赤人の短歌等の類型句が働きかけた様子もうかがわれる。さらに下って、旅の口誦詞章である道行文にこの類型詞章が受け継がれてゆくが、声楽の分野からの影

響を考えるとこの継承も自然に理解される。道行文としては『平家物語』の「海道下」に

……逢坂山をうちこえて、勢田の唐橋駒もとどろにふみならし……　（巻十）

また『太平記』の「俊基朝臣再關東下向事」には

……憂ヲバ留ヌ相坂ノ、關ノ清水ニ袖濡テ、末ハ山路ヲ打出ノ濱、沖ヲ遙見渡セバ、塩ナラヌ海ニコガレ行、身ヲ浮舟ノ浮沈ミ、……　（巻二）

といった類型詞章を残している。

打出浜―寄せ来る波

そしてここで注目されるのは、『太平記』の道行にも詠みこまれていたように、逢坂山を越えて眼下に見下ろす大津市松本・石場の前面の浜が古来「打出浜」と呼ばれていることである。この浜は、『枕草子』が「浜は打出の浜」と載せ、『淡海録』所引の「方角集」では

むかしの東路は相坂の峠より六七町下り、右の手の山下を通り松本の浜辺へ出ず。此間を打出浜と云。

としている(9)。そして、『大和物語』の一七二段によると、この浜で大伴黒主が亭子の帝に歌を奉っている。亭子の帝の石山寺への御参詣が度重なるので近江国の国司が費用や労役の負担を嘆いたところ、それを聞きつけた帝が他の国々の荘園などに準備を申しつけ御参詣なさった。近江の守はこの行幸を嘆き恐れて、そのまま全くの御挨拶もなくお通しすることはできないと、お帰りの途中の打出の浜に立派な行在所をたて、黒主ただ一人をそこにおいておいた。帝がお通りになり「どうしてここにいるのか」とお尋ねあそばされたので、黒主は問いに答えて

ささら波　まもなく岸を　洗ふめり　なぎさ清くは　君とまれとか

と詠んだところ、この歌にお心を引かれておとまりになったとする。

『大和物語』の挿話は、『古今集』では醍醐天皇の大嘗祭の風俗歌の作者である大伴黒主が、くにぶりの歌を詠むことによって亭子の帝の怒れる魂を鎮めた点において、『萬葉集』の浅香山の采女の歌[10]と同じ類型の話である。その黒主が控えていた浜が打出の浜であり、歌によると、ささら波が間断なく打ち寄せて岸を洗っているところの渚である。

巻十三・三二三七の長歌で「沖つ波来寄る浜辺を」と詠み、その反歌三二三八では「白木棉花に波立ち渡る」と詠われた淡海の湖岸は、『大和物語』で黒主が「ささら波まもなく岸を洗ふめり…」と詠んだ打出浜と場所を異にしないであろう。打出の浜―淡海の湖岸は「沖つ波」「白木棉花と描写される波」「ささら波」が打ち寄せて来るからこそ「清き渚」と言えるのである。

ここで重ねて考えておく必要があることは、この地が「狭々波の合坂山」「狭々波の志賀」とも呼ばれている事実である。「楽波の大津」といった言い方は、近江国の楽波の地に続いている大津ということで、近江に限らず分布の広い大津という地名を限定するため、隣接地名を並列しているのである。[11]「ささなみ」からは近江の湖水の小浪が連想されやすいが、志賀と比良との中程あたりの地名である。「ささなみ」の『萬葉集』における用字例を整理すると

神樂聲波
神樂波
樂波・樂浪
左散難彌・左佐浪

とあり、正確に書かれた「神樂聲波」という表記からは、「ささ」という音が、最も良く神楽の雰囲気を言い表わし得る音であったことがうかがわれる。次第に使い慣れるに従って「聲」を省き、「神」を略して「樂波」だけでも「ささなみ」を表わせるようになっていった。「ささ」という音は、楽器の音、人長の持つ採り物の音、ひいては神の寄り来る音等の印象によっているとは思われるが、そのどれとにわかに決定はできない。

この「ささなみ」は『萬葉集』の用字例からもわかるとおり、「ささ」という特殊な音をたてて寄せて来るところの波であり、「さざなみ」と濁って訓んで単に小さな浪の意に解してしまってはいけない。「びんざさら」から「さんさ時雨」に至るまで、日本の芸能の歴史の上で「ささ」という印象深い音がその名称のもととなっている例は数多く見受けられる。

また『丹後風土記』逸文が伝えた浦嶼子の伝承の中の歌

児らに恋ひ　朝戸を開き　吾が居れば　常世の浜の　浪の音聞こゆ

などを並べてみると、常世波と呼ばれる神聖な波には「ささ」という音で代表される波音が必要であったことが思われる。

打出の浜――淡海の湖岸に寄せ来る波は、白木棉花にもたとえられている。木棉花は楮（こうぞ）の皮をさらすなどして紐状にした垂（しで）のことで、その白さが花に見たてられた。そして、波の白さが再度その白木棉花にたとえられているのである。ただしこの場合、単純に波の白さを白木棉花で表現したというだけにとどまらず、波頭を白く崩して寄せて来る波と白い楮で作られた垂の間には、水辺で行われる神事を背景として直接的な結びつきがあったがために、こうした形に伝えられてきたものと思う。

波を花に見たてる手法としては、『古今集』に収録された寛平御時后宮歌合の源当純の歌

山風に　とくる氷の　ひまごとに　うち出づる波や　春の初花　（一・一二）

が注文通りである。この歌「うち出づる波」という表現といい、波の描写の集大成を思わせる。

淡海を見る——近江の水の信仰

逢坂山を「打ち出でて見る」対象とされている淡海の湖面に立つ波は、先に述べてきたように、古い時代の常世波の信仰を思わせ、打出浜の名を持つ定められた場所に寄せ来る「ささなみ」と名付けられるべき波であった。

それでは何故「波」を見るのかということが次の問題となる。

三二三八の反歌や赤人の短歌に詠みこまれた「打ち出でて見る」という類型句、「海道下」等の道行文の中になかば固定して使われるようになった類型詞章としての「逢坂山を打ちこえて」、打出浜という地名の存在といった事例を重ねあわせていくと、「何かを見る」という目的をもって定められた場所へ「打ち出でる」という型式が存在したことが浮かびあがってくる。そして、この型式の存在をさらに補強し得る素材としてその語型、内容の類似という点から注目されるのが「ハマイデマツリ」「ハマオリ」等の名称で各地に広く分布する民俗行事である。

これらの民俗行事はその土地固有の様々な型式を有している場合が多いが、祭に際して海浜または河岸に出ておこなう潮水の浄祓力を尊んだ禊が行事の中心をなしている。

また記録の上では古く『吾妻鑑』に

建永二年丁卯　正月大

十八日　甲午　将軍塚。二所御精進始。爲二浴レ潮給一御濱出也。（『吾妻鑑』巻十八）

のように、浜出神事が度々行われた記録が見出され、『曽我物語』にも

梶原が、濱出してかへりさまに、此女のもとにうちよりて、夜と共にあそびけり。

（『曽我物語』巻第五「五郎、女に情かけし事」）

といった「濱出」の例が見える。そして幸若舞の「舞三十六番」中に「はま出（別名逢萊山）」の名があり、その余流である福岡県山門郡瀬高町大江の幸若所伝の曲中に「浜出」の名を持つ曲が伝えられるなど、古くから特別の神事として執り行われていた痕跡も残している。

こういった「ハマイデ」の名を持つ民俗行事が禊の思想を中心に持っている点に目をとめると、打出の浜から淡海の湖岸を北上した辛崎の地が視野に入ってくる。この辛崎は『萬葉集』巻十三では

大君の命かしこみ　見れど飽かぬ奈良山越えて…（中略）…近江路の逢坂山に手向けして我が越え行けば　ささなみの志賀の辛崎幸くあらばまたかへりみむ…（後略）…

（十三・三二四〇）

と、類型詞章をともなって詠われる有力地名である。そしてまた『かげろふ日記』などで有名なように、平安朝では禊の名所であった。『かげろふ日記』では辛崎での禊と共に、逢坂山を越えて湖水の壮観を目にした時の印象を、

關の山路、あはれ〳〵とおぼえて、ゆくさきを見やりたれば、ゆくゑもしらずみえわたりて、鳥の二三ゐたると見ゆるものを、しゐて思へば、釣舟なるべし、そこにてぞ、え涙はとゞめずなりぬる。

と記している。逢坂山から見下ろす湖岸の眺めによって揺り起こされる作者の感動の源には、忘れ去られた意識下の伝承が大きく働きかけていると思われる。打出の浜から辛崎にかけての淡海の湖岸は、湖水の浄祓力を求める禊祓の神事

と深いつながりを持っていたということができる。

「打出る」という型式を有し、打出浜と呼ばれるような定められた場所を必要とした行事は、時代が下ると禊の様式が表面をおおってしまい、清らかな潮水を求めるという面だけが強調されるようになる。しかし、その一段階前の形を考えてみると、定められた神聖な渚に寄せ来る波――これも「さざなみ」と名付けられ、白木棉花と描写されるように一つの型を必要としたであろう――を「見る」ことによって、その波の持つ浄祓力を一身に取り入れることを目的にしていた、という筋道を立てることができる。

淡海の湖水を「見る」という記録もいくつか伝えられている。

夏四月大伴坂上郎女奉レ拝二賀茂神社一之時便越二相坂山一望二見近江海一而晩頭還來作歌一首

木棉疊　手向けの山を　今日越えて　いづれの野辺に　廬せむ吾　（六・一〇一七）

大伴坂上郎女の『萬葉集』巻六の短歌は、題詞に「相坂山を越え、近江の海を望み見て」とあるように、近江の湖水を眺望する目的を持って逢坂山を越えるということがこの時代におこなわれていた事実を示している。

題詞の「夏四月」は、巻六の歌の配列によると天平九年（七三七年）にあたり、四月の賀茂祭に際して大伴坂上郎女も賀茂神社に参拝したものであろう。賀茂祭は下社賀茂御祖神社と上社賀茂別雷神社共に四月中の酉の日に行われ、『続日本紀』文武二年の条に

二年三月辛己、禁二山背國賀茂祭日　會レ衆騎射一

とあるのをはじめ、度々騎射を禁止する制令が出されており、大伴氏である坂上郎女が奉拝するように、賀茂一族の祭

紀という範囲を越え都からも多くの見物が訪れたようである。

坂上郎女の一行は賀茂神社へ奉拝した後、奈良への帰り道に近江の湖を望見するためにわざわざ逢坂山を越えているのであり、見下ろしている湖岸が前述の打出浜である。また題詞には「晩頭に還り來て」ともあり、この短歌はその日の夜の宴会で昼間の情景を頭に浮かべつつ作られている。歌の興味の焦点は、この日畿内の境である逢坂山を越えてから引き返してきたのだから、道の国へ足を踏み入れるたいへんな旅をしてきたものだという感慨にかたむき、軽い滑稽味を添えて旅愁が詠まれている。

歌そのものは旅の宿りの方面へ興味が集中しているため、逢坂山から湖水を望見したという昼間の経験を直接描写しているわけではない。これがもし、逢坂山での情景を詠んだ歌が載せられているとしたなら、

逢坂を　打ち出でて見れば　近江の海　白木棉花に　波立ち渡る　（三三三八）

の反歌が最もふさわしい状況なのであろう。

とにかく題詞に見られるように、坂上郎女の一行が逢坂山へ立ち寄る目的は近江の湖水を「見る」という点にあったことが注目される。

淡海を眺望するという記録は、もう一つ女帝の行幸に関連して伝えられている。『続日本紀』養老元年九月の条を見ると、元正天皇が美濃国に行幸される途中

十二
戊申。行至二近江國一（テテ）（ニ）觀二望淡海一（ムヲ）。

と、淡海を観望されたことが特別に記録されている。この行幸の道すがら近江国の行在所では、山陰・山陽・南海道の各国の国司等が詣して「土風歌儛」を奏し、美濃国に至ってからは、東海・東山・北陸道の諸国の国司が行在所にて

「風俗雑伎」を奏している。そして、

二十
丙辰。幸二當耆郡一。覽二多度山美泉一。

とあるように、多度山の美泉を御覧になることにこの行事の目的があった。そして、多度山の美泉のうるわしきことを愛でた元正天皇は、この年の十一月後漢の醴泉の故事にちなみ、年号を霊亀から養老と改元するに至っている。

女帝が聖水を求めて行なった一連の行幸のうちの一つということができる記事であるが、いわば、淡海と多度山の美泉を対立、並置しており、その記載のしかたが「淡海を觀望し」「美泉を覧す」という表現になっている点には注意が必要である。この記載は、清らかな水を求めて行幸される時に「淡海」「美泉」を「見る」という具体的な行動によって行幸の目的が達成されたことを示している。

淡海、泉を「見る」という行動を念頭においてその範囲を拡大していくと、『古今集』の小野小町の歌

海人のすむ　里のしるべに　あらなくに　浦見むとのみ　人の言ふらむ　（十四・七二七）

に伝えられている「浦見む」という語や[12]、由来を明らかにしないまま数多く残されている潮見坂という名を持つ坂にまで興味は広がってゆく[13]。これらの例は何の目的で浦を潮を見るのかということを説明する直接な手がかりを全くと言ってよいほど残していない。しかし、淡海の湖水や逢坂山に関連する数々の伝承を並べてみると、浦を見る、潮を見るということにも、由来の遠い信仰行事にまでさかのぼって重なりあう古い常世波の信仰が思われる。

都の人々が近江国を頭に思い浮かべる時、最も強い印象をもって思い出されるのが淡水の巨大な湖である。内陸に生活する都人がこの水に対して持つ印象は、都が山背へ移ってから形作られたものではなく、もっと早く大和に都が造営

されていた時代から、都の背後、山の北陰にある神聖な水を考えていたのである。その水に関する信仰が山背という国名を生み、奈良坂を越えた木津川、宇治川のあたりを神秘な水の中心としてとらえ、さらには近江国の淡水の湖をも考えに入れるようになっていくのは、豊かな水の持つ浄祓力を問題にしたからに他ならないない。天智天皇の御世に造営された近江国大津の宮も、信仰上からは淡海の豊富な水を求めたということが遷都の第一理由としてあげられる。このように、近江国にまつわる信仰の最も重要な部分を水の信仰が占めていると言うことができる。そして、その信仰を断片ながら具体的に示しているのが『萬葉集』の逢坂山に関連する歌群である。すなわち、神の指定した神聖な渚に古い常世波の信仰の印象をとどめた沖の波が寄せて来る、その波を「見る」という所に近江の水の信仰の要点があったのである。このような淡海の水の信仰を具体的に表象する土地である逢坂山は、ささなみ・打出・辛崎などの地と共に近江の逢坂として中央の人々に早くから意識されていた。

＊

池田彌三郎先生は、慶応義塾大学における最終年度にあたる昭和五十四年度の講義において、大学院の芸能史を中心として「見る」「聞く」「食う」という人間の基本的行為の裏側にひそむ、文学伝承・芸能伝承・信仰生活等について、様々な観点から精密な考察を展開された。その研究の一端は『「見る」ということ―観客論序説―』（「藝能史研究」第六七号）や「見る・聞く・食べる」（地人会講演、昭和55・1・18）として発表されている。私のこの論文は、講義と一連の論考に多大な恩恵を受けつつ成立したものであり、池田先生が構築されつゝある「見る」「聞く」「食う」に絡む伝承の研究の中で、一つの具体例として機能することができるならば筆者の望外の幸福である。

注

（1）『折口信夫全集』第三巻所収「雛祭りの話」五〇頁参照。

（2）池田彌三郎先生『百人一首故事物語』三五頁参照。

（3）『日本書紀』孝徳天皇大化二年正月の改新之詔には

凡畿内、東自二名墾横河一以來、南自二紀伊兄山一以來、兄、此云レ制。西自二赤石櫛淵一以來、北自二近江狭々波合坂山一以來、爲二畿内國一。

とあり、紀伊兄山と近江狭々波合坂山が等しく畿内の境としてとらえられている。

（4）京都市山科から逢坂山と音羽山の鞍部を越えて大洋市へむかう国道1号線沿いには、「大谷町、蟬丸神社」「関大明神、関蟬丸神社上社」「逢坂二丁目、関蟬丸神社」の三社がわずかな間隔をおくだけで並立している。

（5）『二中歴』第六関路歴 三関『拾芥抄』下本 三関部第七では三関に勢多・鈴鹿・不破をあげる。

（6）井口樹生氏「上代における関についての研究」（『上代文学研究と資料・国文学論叢第四輯』）参照。

（7）日本古典文学大系『萬葉集二』四三九頁、八九四番（巻五）補注参照。

（8）『萬葉集』巻三、山部赤人「望不尽山歌」の長歌をあげておく。

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　布士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　不盡の高嶺は

（三一七）

（9）近江史料シリーズ（4）『淡海録』滋賀県地方史研究家連絡会刊一〇頁参照。

（10）『萬葉集』巻十六

安積香山　影さへ見ゆる　山の井の　淺き心を　わが思はなくに　（三八〇七）

の歌の左注に、陸奥国の采女がこの歌を詠み葛城王の怒りを鎮めたとある。

（11）『折口信夫全集』第九巻所収「萬葉集講義」二八八頁参照。

（12）西村亨氏『王朝恋詞の研究』四三一頁参照。「浦見」が用いられた例として四首をあげ、

浦見ということばがこれだけ熟して用いられる背後には、浦見が単に海辺の見物ということではなく、特殊な生活行事であったのではないかという推測も成り立ちそうである。

と述べられている。

(13) 池田彌三郎先生『「見る」ということ―観客論序説―』(藝能史研究・第六七号)「五、潮見・国見・山見・岡見」等参照。